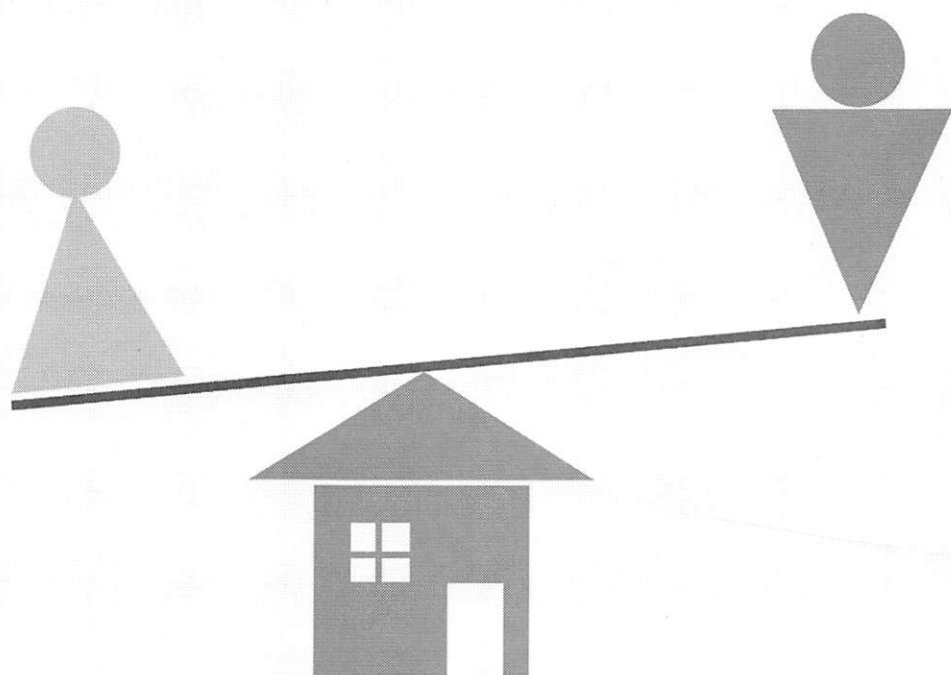


平成19年  
3月号  
250円

# やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



離婚

インビサート(拡張)

役割の分担もしくは衝突  
皮膚～奇跡的なその機能  
進路の見つけ方について

「自分勝手な離婚は、離婚する人にとって後悔の源であり、離婚された人にとっては権利の侵害であり、家族にとっても大変な不安定さをもたらすものとなります。時には生涯を通して血の流れるような痛み、苦しみが続くのです。」p. 3



結婚生活がにっちもさっちも行かなくなったときの解決法の一つに離婚があります。世の中には離婚したほうが本人にとっても周囲にとっても本当に幸せになるというケースもありますが、避けられるものなら避けるに越したことはない、というのが真実でしょう。

離婚の周囲への影響は計り知れません。子供がいればなによりも子供への影響が心配されます。環境だけが子供の成長を左右する要因ではありませんが、バランスを欠いた家庭、親の不安定な心理状態が後々まで子供の心に傷を残す可能性もあります。離婚した本人たちも、その後の生活基盤や離婚して本当に幸せになれるのか、自分自身や周囲にとってプラスに転じるのか確証はありません。

知人に離婚話が持ち上がっている話などを耳にすると、離婚も実際に身近なものになってきているのだと感じられます。対岸の火事とのんきに構えている場合ではなく、たとえ今現在はその危機に瀕していなくても、自らの結婚生活を見直して、実際に機能しているのか自戒しなければなりません。

離婚の原因は様々です。結婚の意味や意義を学ばないまま結婚して現実とのギャップに苦しんだり、結婚後も夫婦それぞれの役割やお互いに対する権利・義務を尊重しないために溝が深まっていったり、忍耐や互いの歩み寄りが欠如していることなど。離婚を避けるには、そして家庭内不和を避けるには、結婚、結婚生活そのものを再認識する必要があると思います。

結婚生活に困難はつきものです。問題が起きたからといってすぐに切り捨てることはできませんし、問題解決まで多大な忍耐や努力、犠牲を払わなければならないかもしれません。しかし運命に抗えば抗うほど、自分自身の願望に執着すればするほど、そして満足感に欠けているほど困難の度合いは増すといえます。また結婚生活は困難の見返りとして、人が成長し人格形成する最適な場を提供してくれるのだと思います。

イメージや他力本位に基づく結婚で破綻しないよう、結婚について子供の頃から学ぶ必要があるでしょう。今現在大人であり、親である私たちが結婚生活の見本となるよう努力し、子供にもその姿を見せながら、必要な知識や技術があれば伝えていかなければなりません。

## 今月号 内容



- \* 編集部より ..... 2
- \* 離婚 ..... 3
- \* 心を知る  
「インビサート (拡張)」 ..... 3
- \* 祈りのある毎日へ ..... 6
- \* 預言者ムハンマドを語る  
「信頼できるということ」 ..... 7
- \* 役割の分担もしくは衝突 ..... 8
- \* リサーレイヌールより  
「年老いた人々へのメッセージ」 ..... 10
- \* 皮膚～奇跡的なその機能 ..... 17
- \* 年老いた人々へのメッセージ ..... 15
- \* 映画から考える  
「銀河鉄道 999」 ..... 21
- \* クルアーンは人生のガイドブック ..... 23
- \* 道を見出す方法について ..... 24
- \* 熟年離婚 ..... 28



離婚とは、人が婚姻という状態から抜け、自らを、結びつきのない状態にする行為です。まれにそれは人を棄にし、気持ちを支えさせるもののように見えることがあります。しかし多くの場合、それは不安定さや貧窮を伴うものとなるのです。

離婚は宗教的観点からは、罪でも善行でもない行為のうちで最も好ましくないものとされています。しかし、その承認や許可が好ましくないものであると同様に、それが禁じられることも不自然で、不適当なことです。

離婚をせざるを得ない状況に対し見て見ぬふりをしてしまうのは、人の本質やその特徴を知らずにいることから生じるものです。結婚する人が皆、互いにうまくやっていけると期待することは、皆が等しく同じ性質を持ち、同じ気質であり、同じ性格であると想像してしまう、ある種の鈍感さを示しているのです。

自分勝手な離婚は、離婚する人にとって後悔の源であり、離婚された人にとっては権利の侵害であり、家族にとっても大変な不安定さをもたらすものとなります。時には生涯を通して血の流れるような痛み、苦しみが続くのです。

離婚が病んでいる器官への内科的特效薬だとすれば、結婚が十分な考慮のもとで行なわれること、しっかりとした条件のもとで結ばれることは衛生上の注意深さと見なすことができるでしょう。だから離婚によって家族を傷つけ、あるいは離婚をやめて心を苦しめる前に、まず結婚が調和に関する細心の注意のもとに行なわれることが大切であり、将来においてもこの調和を保証するであろう条件に関して譲歩せずにいることが必要なのです。

ある世界では、離婚を禁止し、あるいは到底可能ではない条件をつけることにより、一緒に生きることを考えられなくなっている人々を無理やりくっつけようとしてきました。またある世界では、女性を、いつでも思うままにめとったり、放棄したりできるもの、というような見方で捉え、もの扱いしてきました。一方は男性にとっての苦痛であり、もう一方は女性を人間扱いしていないという状況を示すものに他ならないのです。



## インビサート(拡張)\*

インビサートの字義は大きくなり深まっていくこと、拡大し膨張することですが、イスラーム神秘主義者たちは、全ての人々を受け入れ、優しい言葉や快い振る舞いによって他の人々を喜び満足させられるようにシャリーア(イスラーム法)で許された範囲内で心を緩めることを指して言います。全能の神と人間の関係という文脈においては、それは畏怖と希望が混ざり合った精神的状態を意味します。この状態を獲得した人々は神の臨在の前に恐れおののき、そして神の臨在からもたらされる歓喜のそよ風に吹かれて活気を得るのです。彼らは息を吸いながら畏敬の念を抱き、息を吐きながら歓喜に包まれるのです。

以上のごく短い記述で指摘したように拡張は、我々と被造物との関係、そして我々と創造者との関係の二つの範疇はんごうに分けて扱うことができます。

被造物と我々の関係という点に関して、拡張は我々が神そして真理と結ぶ関係に注意深くあることを意味します。すなわち我々は社会の一住民として生活し、周りのすべての人々に対して率直に接し敬意を表明することを意味します。そして理解力の度合いに応じて人々に接することをも意味します。

高貴なる預言者(彼に祝福と平安あれ)は周囲の人々に対して率直かつ誠実に振る舞い、作法や形式ばったことは避けるようにしていました。聞き手の理解度に応じて話し、時には賢明で意味のある冗談を交えたりもしていました。不信仰や不当行為、罪を目にすると心の内では苦しみを感じ、皆の行く着く先や来世を憂慮うれしたものでしたが、常に微笑をたたえ快活に振舞っていたのでした。ミンハージュで述べられているように、心は鏡のようです。あまりに厳肅すぎたりいつもまじめくさってはいは曇ってしまうもの、その曇りを取り除くには愉快な心地よい言葉をかけることです。

万能の神と我々の関係という点に関して言えば、拡張とは魂において畏怖と希望とを同時に感じることを意味します。畏怖と希望は魂の状態であるので、たいていは神への道のりを進み始めたばかりの者たちの中に見出すことができます。他方で拡張は神の知識がある者の状態であり、さらに心の生き方という次元であります。拡張のこのレベルに達しようと奮闘中の者が有する拡張に似た状態とは神の知識から来る高揚感です。この状態によって神との関係において心を広げることにつながり、ひいては自制や冷静さを失っていくことになるかもしれません。

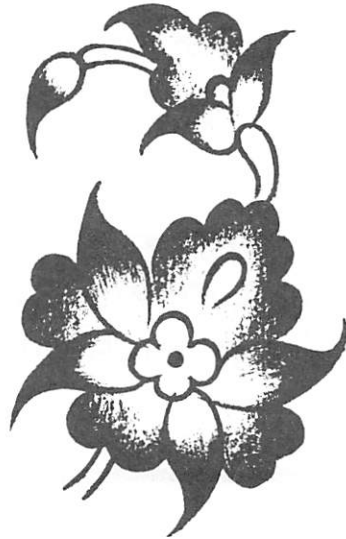
神の道における旅人が現世的な欲望や愛着から完全に解放され、神の御名や属性を映し出す輝く「鏡」になったときに拡張は出現します。結合の段階(旅人が神の臨在と統合を感じる段階)であれ消滅(旅人

\* この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

の自我が消滅することによって、神への愛に酔いしれ神の臨在や統合を意識している真っ最中に自己を忘却してしまうこと)であれ、この段階は旅人が、もたらされた天来の靈感にしたがって自分自身を方向付け、他の誰にも知ることでできない「色彩」を帯びるようになる神秘的な地点なのです。そのような境地の人々が自分自身の拡張を隠すことは不可能ですが、そこに達していない人々がそれを語るのは傲慢ごうまんというものです。このことについてルーミーが非常に適切に表現しています。

宮廷人が国王の注意を引こうとして気取った態度を取ったとしても、あなたはそうに試みるべきではない。なぜならあなたは(その行為を正当化する)文書を携えていないからである。はかないこの世の制約から逃れられない者よ、消滅めいてい、醜みにく、そして拡張(といった段階)が意味するものをどうやって知ることができるだろうか？

実に、体に仕える者は精神の状態に気付くことなどできないのです。体の中に囚われている人々が精神性を認識することは不可能なのです。裂けて穴の開いた心の痛みや、拡張、収縮について、神への愛という炎に幾度となく焼き焦がれた人々の魂に尋ねる必要があるのです。





約束において忠実なるお方よ  
誓約の遂行において力強きお方よ  
力の気高きお方よ  
いと高く、近いお方よ  
近く、情愛細やかなお方よ  
親切さが卓越したお方よ  
高貴さが並びなきお方よ  
力の偉大なお方よ  
偉大さが卓越したお方よ  
栄誉を讃えられるお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、  
あなたの他に真の神は存在しません。  
私達を地獄の炎からお助け下さい。\*

\*ジャウシャン・カビール（偉大なる鎖帷子、アッラーの美しい御名と属性を知らせるお祈り）には、祈願、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。ジャウシャン・カビールのアラビア語／日本語訳オーディオCD・ROM またはプラスチックカバー本は出ています。詳細は：<http://www.isuramu.com/shopping>



信頼できるということ\* (続き)

### 移住（マディーナへの聖遷）の際のアッラーへの信頼

マッカからマディーナへの聖遷の時、家の四方は預言者ムハンマドを殺そうと必死になっている者たちに取り囲まれていた。預言者ムハンマドは「またわれは、彼らの上に障壁を置き、また背面にも障壁を置き、その上彼らに覆いをした」（ヤー・スィーン章36/9）という節を唱え、彼らに向かって一握みの砂を投げかけられた<sup>†</sup>。そして、全く恐怖やパニックにとらわれることもなく、その場から歩いて離れられたのである。その後、サウルの洞窟に到った。サウルは、若者でさえ登るのが困難な山頂にある洞窟である。預言者ムハンマドは53歳にして、そこに登られたのであった。彼の人生はこのような困難ばかりの中に過ぎたのである。この幸運な洞窟が、それ自身の言葉で呼びかけているのに答えて、預言者ムハンマドはそこで何日か泊まれ、この洞窟に名誉を与えられた。

マッカの者たちは、洞窟の入り口で見張っていた。彼らとの間に、1メートルあるかないかという状態であった。アブー・バクルは緊張のうちにあった。彼はその時、預言者が彼に託されているかのように考えていたのであった。「もしこの託された方に何かあったら...」と恐れていたのである。しかし、預言者ムハンマドの口元にはいつものように微笑が見られた。このお方はアッラーへの信頼の中にいたのである。アブー・バクルを慰めて言われた。「恐れるな。アッラーは我々と共におられる」<sup>\*</sup>

### 戦いの際におけるアッラーへの信頼

フナインの戦いで、最初イスラーム軍は苦戦を見せていた。教友たちは逃げ惑い、敗戦になることを皆が確信しているような状態であった。その時、予想されていなかった出来事が起こったのである。預言者ムハンマドは、聖アッパースが止めようとしていた馬に乗られ、敵の隊列に向かって行かれた。彼は大声でこう叫ばれた。「私はアッラーの使徒である、このことに嘘はない！私はアブドゥルムッタリブの孫である、このことにも嘘はない」<sup>‡</sup>

このお方のこの振る舞いは、見る間にイスラーム軍を生き返らせ、まとまりを持たせたのであった。そして、不運は幸運へと変わったのである。

---

\* この文章は“Prophet Muhammad: Aspects of His Life: 1”よりの訳です。

† Ibn Hisham, Sirah 2/127

‡ Bukhari, Tafsir (9) 9; Ibn Hanbal, Musnad 1/4

§ Bukhari, Jihad 52; Muslim, Jihad 78

「アッラーは人を、何かを必要とする存在として創造されたのですよ。」先日、ある機会を通して私に言われた言葉です。何か必要なものはないか、という問いに、「ありません。」と主張した時に言われたものです。誰が言ったものかというのはここでは重要ではありませんが、私よりも立派で、いたわりや慈しみの翼を私に差し伸べてくれている、あるいは差し伸べようと望んでくれているある人からの言葉でした。

一分程度にすぎないこのやりとりは、私に、ごく最近に起こった別の出来事を思い起こさせました。ある人が電話で、自分は夫を必要としていないということを主張していました。しかしその声のトーンが、そこで話している内容を打ち消していたのです。なぜなら、さっぱりと解決したのだ、というようなトーンではなく、多くのニーズを抱えていることを示すトーンがそこにあったからです。

手短かに述べましょう。ドン・キホーテのように風車に戦いを挑む必要はないのです。この比喩でいいたいことは、つまり、その本質にそぐわない形で振舞う必要はない、ということなのです。女性はどういう形であれ、どこでも、いつでも、その夫に対し必要性を持っているのです。もちろん、夫もその妻を必要としています。彼らは互いのライバルではなく、お互いの不足や欠点を補い合う、一つの完全体の、二つのピースなのです。存在論として、この二つのピースは同等の価値を持ちます。しかしそれぞれが持つ特徴、特性という点から、それらは同じではありません。あることについては男性が優れており、あることにおいては女性が優れているのです。

運命、言いかけるならば人間の意志がなんの役割も果たさない、果たすことができない真実を受け入れるということは、何よりもまず、その真実を尊重することを意味するのです。つまり風車に戦いを挑まないこと、です。それからアッラーのご意志がこれを選択されたのであるがゆえに、そのご意志、お望みを尊重することともなります。そして何よりも重要なことはおそらく、人が、自分が創造されたことを認め、自らを尊重することです。なぜなら、自身を尊重しない人は、他者を尊重することもない、ということ私たちは知っているからです。

私は次のように考え、またこの考えを説明してもきました。夫婦は自分達の間での役割の区別という原則を取り入れ、仕事の分担を行なう必要があります。これは生活のすべてを包括するものである必要があります。家庭で、職場で、市場で、青年時代、老年時代、子供の世話、家族関係において。要するにあらゆる場面で、二人が同意している決まりごとが必要なのです。時々、ただこの作業だけのために一緒にいて、冷静に、喧嘩や討論を始めることなく、これらの決まりごとについて話し合うべきです。条件が変わったり、発展したりした時、あるいは実行するにあたって生じたり、経験によって予想されたりする



不十分さがあれば、必要に応じて前の決定を変更するべきでしょう。あるいは新しいものを付け加える必要があるでしょう。空白地帯が生じないようにしなければいけないのです。

もし実行されなければどうなるのか、と問われるかもしれません。その場合、生活はいい加減な、でたらめなものになるでしょう。生じてくる出来事が、彼らの生活に形を与えます。自分たちが従う責任を持つ、と決めた原則も存在していないので、力は互いと衝突するようになります。しかもそれがしばしば起こるようになります。この衝突は、彼らの暮らしをつらいだけのものにするでしょう。家庭の中が混沌とした状況になります。このような表現がもしふさわしいなら、夫婦はお互いに対シテロを起こしているのです。この混沌は互いを溺れさせ、苦しませるものになるでしょう。

もし、このような状況にある人がムスリムであれば、アッラーはその家庭から恵みを取られるでしょう。死においても共にあろうと誓い合った二人が、団結することができるにいれば、一致や団結の実現の理由となっているアッラーの美名が彼らの家庭や暮らしにおいて顕現することがなくなってしまふのです。これは、アッラーからの結びつきの欠損している生活を送る、ということを意味し、アッラーに結びついていない生活は、人をこの世でもあの世でも幸福にすることはありません。安定させることもありません。

決して、「あの人たちはあんな感じだけど、この世での富の獲得もうまくやっている。」とは言わないでください。なぜならこの状況は、深くものを見ることが出来る人たちの観点からは、イステイドウラジュといわれる状況に他ならないのです。これは、「アッラーに反逆する人に大きな物質的恵みが与えられている状態」を意味するものです。

このような、困惑した思いの中にいる人達に、ささやかな、二つのことをお勧めします。まず紙を用意し、ペンを手にとってください。夫のよい性格、悪い性格、気に入っている特徴、気に入らない特徴を対比させながら二列に並べて書き出してください。そして、どちらの方が多いか見てください。

二つ目として、その死を考えてみてください。その時に予想される感情、振舞いを考えてみてください。真の愛情が明らかにされる、その損失の瞬間を。

これらによって何が起こるのでしょうか。この観点から見ることは、人に新たな視野、新たな地平線を与えるのです。もちろん、その人の到達段階に応じた形で、その地平線を人は旅します。しかしどの段階にいたとしても、これまでとは大きく異なることを感じ、大きく異なることを考えることになるでしょう。そしてそれはきっと、その人を新たに家庭や配偶者に結びつけるものとなるでしょう。

たった一つの言葉が私たちに多くを考えさせます。そう、アッラーは人を、多くのニーズを持つ存在として創造されたのです。結婚は、このニーズが応じられるための、神意による一つの命令なのです。場合によってはファルドとなり、場合によってはスンナとなる命令です。西洋起源の近代的思想ではなく、私たち自身の文化や歴史、宗教的、民族的な価値が、私たちに方向付けるべきなのです。



## 年老いた人々へのメッセージ

## 13番目の希望

この希望の中で、私は私の人生において、重要な場面をお話ししようと思うが、たぶん、大変話しが長くなるかもしれないので、どうかうんざりなさぬように、又立腹せずに聞いていただけたらと思う。

世界大戦時に、ロシアで捕虜となり、それから、解放された後、イスタンブールにある『英知の館』で、イスラームに奉仕するため、2、3年滞在した。それから、英知なるクアーンとガウスィ アウザムの多大な努力と、私が老いを感じることによって、イスタンブールの文化的生活に、うんざりし、華麗な社会生活に嫌気がさしてきた。そして、祖国への思い（ダーウッスラ）という言葉で示されるような祖国を愛する感覚が、私を私の祖国へと送った。私はそもそも死ぬ、そうであるなら、私の祖国で死のうとヴァンへ戻った。



一番始めに、ヴァンのホルホルというマドラサを訪れた。みてみると、他のヴァンの家々のように、そこも、ロシアの占領下にアルメニア人達が焼き払っていた。ヴァンの有名な城壁は、山のようにまとまった石からできているが、私のマドラサは、そのちょうど、真下にあり、それとくっついている。私がかかわりを持たなくなつて7、8年経ったが、そのマドラサには、真の友たち、兄弟たち、親しいを想い、まるで目の前にかれらがいるかのようであった。その献身的な友達の一部は、実際殉教者となり、そのほかのもの達も、災難によって、精神的には殉教者として、この世を去った。

私は泣かずにはいられなかった。そして、マドラサの全貌を見渡すことができるその城壁にあるマドラサのはるか上方にある、ミナーレ2つ分の高さのある丘に登って、すわった。7、8年前を思い出していた。私の想いがあまりにも強かったので、幻想の世界を、まるで真実かのように感じ、さまよっていた。あたりには誰もいなかった。その幻想の世界からそして過ぎ去ったの時から、呼び戻されることもなかった。なぜなら、私は独りぼっちだったから。7、8年間の光景は、目を開くと広がり、1世紀ほどにも長く感じられた。

ふと、気がつくと、私のマドラサの周りや町の中や城壁のような場所も、端から端まで焼かれ壊されていた。以前見たものと、今見たものは違い、まるで200年前の世界にやってきたかのようにであり、寂寞として、それらを眺めていた。その家々の人々のほとんどは、私の親友か親類であった。そして、彼らにアッラーのご慈悲あれ、多くの人々は、移住し、この世を去っていた。異郷の地で、悲惨な状態に陥ったようだ。アルメニア人以外ヴァンあらゆるムスリム達の家が、破壊されたのをみた。私の心は深く深くう

ずいた。あまりにも深いうずきなので、1000もの目ももし私にあれば、それら全ての目で、私は涙を流したことであろう。悲しいかな、異郷の地から祖国へ戻ったので、友人、知人達から離れたそのさびしい思いや孤独さから救われたと思っていた。「12番目の希望」で御話ししたアブドゥルラフマーンのような、私の心と堅く結びついた何百人もの、友人達は、墓の中におり、そして、知人達の住んでいた場所は荒れ果てているのを知ったのである。以前から記憶に残っているある方が伝えた話がある。その意味を完璧に分からなかったのだが、その悲惨な光景を目の当たりにし、その行の意味を私は完全に理解したのであった。それはこのようである、

「もし、友人達との別離がなかったなら、死は私達の魂には起こり得なかったであろう。さあ来て、魂を取っておくれ。」

つまり、もっとも強く人を死なせるものは、親友達との別れである。さよう、他の何事も私をこれほどまで悲しませることはなかったし、泣かせることもなかった。もし、クラーンと信仰が救助に駆けつけてくれなかったら、その嘆き苦しみ、悲しみは、私の魂を飛び散らせてしまったであろう。

いにしえからずっと、詩人達は詩の中で、知人たちとあった場所を過ぎ去った時と共に、荒れ果てた場所を見て嘆き悲しんできた。この最も悲しい光景を、私は確かに自分の目で見た。200年後、こよなく慈しんだ親友達の住む場所を訪れた男に、おしよせる寂寞さを感じながら、私の魂と心は、私の両目を助けるかのように、泣きじゃくったのであった。その時、目の前に広がる、荒れ果てた場所が、以前は、整備されて喜びと楽しみにあふれた場所であり、そこで、20年近く私の大切な学徒達と共に学びすごした、私の人生の中で幸せだった場面が、まるで走馬灯のように、一場面、一場面、目の前に繰り広げられ、それから死んで去ってしまった場面も現れ、大変長い間私の夢想は続いた。



その時、この世での状態に、大変驚いた。どのように自分自身をだましつづけているのであろうか。というのは、その状態は、この世が完全にはかなく無常であること、そして人間もまたその中でただの客に過ぎず在るのだとということを同時に示していたからである。真実を知る人々は、絶え間なく、「この世は残酷で、偽りだらけで、はかない。騙されるべからず。」といていたが、それがいかに正しかったか、私はこの目で見て、知った。人間はそれぞれその身体や、住む家と関わりを持つが、街や国やそして地球とも関わりがあることを改めて知った。なぜなら、私の身体について、老いの痛みのために、私の両目が嘆き悲しむのと同様に、マドラサの老い、いや、その死のためには、10もの私の両目で、涙を流したかったからである。そして、この美しい祖国の瀕死の状態は、100の私の両目で涙を流す必要があると感じた。

ハディースの一つに、毎朝一人の天使が「あなた方は死ぬために生まれ、この世にやってきた。そして、朽ち果てるために建物を建てるのです。」と呼び、語る。この真実を耳で聞くだけでなく私はこの目で見ていたのであった。

さて、その時の、そのような私の状態が、なんとも私を激しく泣かせたが、10年も経っても、そのころを思い出し、そのような状態に陥ると、また私は泣き始めるのである。さよう、何千年も生きつづけて来たその老いた城壁の頭上の場所が荒れ果てていること、そして、足元の町が、たった8年間で800年も年を取ったこと、城壁の下の、大変活気ある、知人達がよく集まった私のマドラサの死が、オスマン帝国のマドラサすべての死を意味する、実体なき亡骸の巨大さを示していた。そして、ヴァンにある城壁の一塊の石がオスマン帝国の墓石となったかのようであった。確かに、そのマドラサで、8年前私と共にいた愛らしいは墓の中で、私と一緒に泣いていた。おそらく、その街の朽ち果てた壁たちや、散らばった石たちも私と一緒に泣いていた。それらが泣いているかのように私には見えたのである。祖国でのこの<sup>私</sup>の侘しさ、孤独さは、私にはたえられないだろうと、私はその時感じた。私も墓の中に、彼らの傍へ行くべきであり、さもなければ、山のほら穴にこもり、そこで死を待つべきであると考えた。私は自分自身に語った。「そもそも、このように、この世で耐えることは難しい。耐えようとする<sup>と</sup>と焼きつくような別離の念が生まれる。さよう、確かに死は生を超えるものである。だが、このような生の痛みは、耐えることのできるようなものではない。」

それから私は6方向から、全てを一目で眺め、それらは、全て暗黒であると理解した。私の激しい悲しみから生じる思慮のなさは、私にこの世を恐ろしく、むなしく、侘しく感じさせた。私の頭は押しつぶさ



れそうであった。私は魂の中で、敵がしかけた無数の害悪に対し、私の永遠に続く、終わることのない望みを満足させるため、助けを捜し求めていた。そして、限りない別離と離散と荒廃と死から生まれる<sup>さびしく</sup>寂寥の念と苦痛に対する癒しを待ち望んでいた。すると、突然、明白なる奇跡のクルアーンが、「天と地におけるよろずのもの

のはアッラーの栄光を称え奉る。まことに彼は威力者、英明者であられる。天と地の大権は、かれのものである。彼は生を授けたまう。彼はよろずの事物の上に全能であられる。」(57章1、2節)の節の真実が癒しとなった。その痛みを伴う別離の恐ろしく悲しい幻想から私を救った。そして、私の目を開いてくれた。

見てみると、果物のなっている木々の頭上で、果物は微笑みながら私を見ていた。「私達に注意して下さい。ただ、荒れ果てたものを見て立ちとどまらないで下さい。」と語っていた。このクルアーンのこの節の真実は、次のように思い出される。

ヴァンという大きな広野の一頁に、客として存在する人間達の手書きで記した町の形をした手紙は、ロシアの占領という洪水のように押し寄せた恐ろしい災難に、沈められ、消し去られたことが、あなたをなぜこれほど悲しませるのであろうか？本来の真の所有者の、そして、すべての所有者で主であられ、終わりなく、美しく記し給うアッラーを思い起こそう。このヴァンという頁に、大変美しい文字で、以前存在していた状態を再び復活させ、記したまうたではないか。それらの場所は何もなく、荒れ果てて、取り残されていると嘆くことは、真の所有者を忘れることからくる過ちである。

しかし、その過ちとその焼け付くような状態から一つの真実の扉は開かれた。そして、その真実を完全に受け入れる自我の準備が整えられた。さよう、鉄を火に入ると柔らかくなり、美しく、価値ある形にできるのと同様に、その悲しむべき状態、そして、恐ろしい状況は、火となり、私の自我を柔らかくした。奇跡のクルアーンが繰り返す節の信実によって、真の信仰の喜びを完全に自我に示し、受け入れさせたのである。

さよう、リッラーヒルハムド（アッラーに称讃あれ）、その節の真実は「20番目の手紙」のような便りで、詳しく明らかにされたように、全ての人が信仰の力をそれぞれに高める信頼の拠り所を魂と心とに与えられたため、その状態の恐ろしさよりも1001倍もおそろしく害のある災難に対しても抵抗できる力とアッラーからの信仰が私にも、与えられたのである。そして、このように警告した。

「あなたの造り主であられるその国の真の所有者の命に、全てのものは従う。すべてのものの統制は彼の手中にある。彼との結びつきだけで十分である。」その私の創造主を頼り、理解した後、敵として見なされる全ての者が、敵という立場を否認し始めた。嘆かせる悲しい多くの状況は私を楽しませはじめた。

多くの便りの中で確かな証明によって明らかにしてきたように、そのかぎりない熱望に対して、来世を信じることにより生ずる光から、この上ない援助を得られた。小さな、はかない、短いこの世の知人達に対する私の願望や結びつきではなく、おそらく、あの世の生活、永遠の世界、永遠の幸せのための永遠の希望に対して、十分な援助がもたらされた。なぜなら、彼は、慈悲の顕現によって、つかの間の客室であるこの世という場、地表において、その客たちを2、3時間楽しませるために、毎春、春の食卓で、美しく盛りつけられ、楽しませてくれる、無数のめぐみを与え給う。客達に朝食をふるまった後で、永遠の地から、永遠の楽園にある8の扉を、悠久の時の中で、数限りなく準備し給う慈悲あまねく、慈悲深き御方の御慈悲を、信仰と共に信頼し結びつく事を知る者は、援助とめぐみの源を見出す。そして、最もたやすく永遠に至る様々な希望を手にし、それらを保ちつづけることができるのである。



その節の真実によって、信仰の明るさによる光は、美しく輝き、私のマドラサとこの町のや親友達を偲び、嘆き悲しむ状態を消し去り、明るく輝かせ、「あなたの知人達が行った世界は暗黒ではない。ただ場所を移動しただけである。再びあなたは彼らに会うであろう。」と忠告してくれた。そして、嘆き悲しむことを完全に止めさせた。そして、この世にいる者達の変わりに来る者達やその人々と似たような者達もまた私は見出せるだろうことを教えてくれた。

さよう、リッラーヒルハムド、〔アッラーに称讃あれ〕 死んだヴァンのマドラサをイスパルタのマドラサと想像し、そこに存在した知人達をも、この上なく大切な知人達と想像してみた。

そして、この世は無であり、侘しくはかないと思っていたことや、荒れ果てた祖国についても考え違え

をしていたことを知らされた。真の所有者は、英知の要求によって、人間の作った様々な掲示板を変え、彼の様々な手紙を更新し給う。一本の木になっている果物をもぎ取ると、もぎとった場所に、新しい実がなるように、人間界での、このような消滅と別離もまた、ある種の新生であり、更新である。信仰の点から捉らえるなら、それは、知人達がいなくなってしまった時の痛みの伴う悲しみではなく、恐らく、違った場所で再び出会うための別れからくる味わい深い悲しみが<sup>はら</sup>一種の新生であるといえる。万有にその恐ろしい状況によって存在するよろずのものが暗黒に見えていたのだが、それらの場面を光り輝かせた。そして、その時、私のその状態に感謝を捧げたくなった。アラブ人のその話を思い浮かべ完全にその真実を理解したのである。そして、このように私は語った。

「敵意を持つ見知らぬ者、死んでいる野蛮な者、泣きじゃくる孤児として存在する幻想を取り去り、彼らを生き活きと、親しみ深く、楽しげに、(時を) 唱念と称讃に費やす愛らしい兄弟として示す信仰の光に讃えあれ。」

精神的厳しい状況下にある影響を受け生じる思慮のなさによって、万有の存在、その一部は敵や見知らぬ者として、又一部は恐ろしい遺体として、また別の一部は独りぼっちで泣きじゃくる孤児という形で、迂闊な私の心に描き出されたこの恐ろしい光景は、光り輝くし信仰によって、明確に理解したのであるが、

その見知らぬ敵のような者達は、実は一人一人私の親友であり兄弟であった。そして又、恐ろしい遺体達といえ、それらの一部は、生き活きとし、親しみ深くもあり、彼らの義務から解放された者達であった。そして又、泣きじゃくる孤児達の震えは、神への唱念と称讃による震えであることを信仰の光によって知ることができたので、その無限の恵みの源である信仰を私に与えてくださった偉大で、いと高き創造者に無限の感謝を捧げた次第である。



そして、この世において、この世と同様に大きな私個人の世界に存在する全てのものが神に感謝し、神の栄光を讃美していると私が考え、その私の考えに基づいて、利用することは、私にとって正当なことだと思われる。つまり、それは信仰の光に讃えあれと私が唱えると、その世界に存在する全てのものが、お互いにそれぞれ違った言葉で、私と共に讃えるということである。そしてさらに又、思慮せぬ恐ろしい状態から無に引き下げる人生の数々の喜びや完全にしておれてしまい崩れた数々の熱い望みや、最も狭い円の中に縮まって残り、おそらく、台無しになってしまった私個人への数々の恵みと楽しみが、突然、他の「光の書簡集」でも詳しく説明されたように、変化した。信仰の光によって、心のまわりに描かれた小さな円が、このうえなく大きく広がり、全宇宙はその中に入るほどであった。そして、ホルホルの庭でしておれてしまい、味わいを失った数々の恵みの代わりに、この世とあの世で、恵みの食卓と慈悲の皿が準備された。目、耳、心臓のような10の数ではなく100ほどの人の諸器官が、それぞれ長い手の形をして、それぞれの信仰者達のレベルに合わせて、慈悲深い2つの食卓に手を伸ばし、あらゆる方面から数々の恵みを集めているのが見えた。それと同時に、来世についての真実の説明と無限の恵みへ感謝し、私は次のように唱えた。

「この世とあの世をめぐみと慈悲で満たし、真の信仰者達の信仰の光と、創造者の許しによって開かれたより強い感知力と共に、その2つの中のものから益を引き出す信仰の光に讃あれ。」と。

そもそも、信仰は2つの世界で大きく影響を及ぼし、永遠の世界においても、数々の果実と喜びとなるのであるが、知性でそれを包みこむこともできないし、説明することも難しい。

さよう、私のように老いによって多くの親友達との別離の痛みを感じておられるご老人、ご老婦の方々よ。老いについてあなた方が年齢的に明らかに私よりも上であられたとしても、私はあなたがたよりももっと老いてしまっているのは確かだ。なぜなら、人はその同胞達に対して憐れみの情を抱くものであるが、本性に基づき、私はその憐れみの情がこの上なく強く私自身の苦しみだけではなく、何千人もの兄弟達の苦しみも、その慈しみの神秘により感じてしまうので、まるで何百年も生きているかのように、わたしは年をとってしまっている。もしあなたがたが別離のつらさをどれほど多く感じられたとしても、わたしのつらさには至らないと存ずる。なぜなら、わたしには息子はいないが、息子のことを例にとって考えてみよう。わたしの本性に基づくこの強い憐れみと慈しみの情は、何千ものムスリムの子供たち、さらには無垢な動物達の悲しみに対しても、ある種の憐れみ、苦しみをその慈しみの神秘により感じるからである。わたしには私自身の家というものはないが、わたしはただそのことを考える。恐らくこの国とイスラーム世界の地をわたしは自分の家のように感じており、信仰とイスラームを守る努めについて強く感心を抱いている。そして、その2つの大きな家に住むイスラームの教えに従う同胞達の悲しみは、わたしの悲しみであり、彼らの苦しみは、わたしの苦しみとなっている。



さよう、わたしの老いと別離のつらさによって生ずるすべての悲しみに対し、信仰の光は万全であった。壊れることのない希望、絶たれることのない信頼、消えることのない光、限りのない癒しを齎したのである。老いによってあなた方に生ずる暗黒と思慮のなさや悲哀と悲痛には、信仰は十分であり万全である。

実際に、最も暗く、光なく癒しのない老いとは、そして最も悲しく恐ろしい別離とは、逸脱した者達、放蕩者達の老いである。そのような希望、光、癒しを与える信仰から喜びと影響を受けるには、年老いた人々にふさわしい、イスラームに適した、しもべとして適切な方法を、意識的に身につけることによって可能となる。若者達を真似しようと努め、彼らのように酔い、迂闊にことに頭を突っ込み、老いを忘れようとしても可能とならない。

「若者の中で最良な者達とは、円熟した者達を真似する者達であり、老人達の中で最悪な者達とは若者達を真似する者達である。」というハディースを考えてみよう。

つまり、若者の中で最良な者達とは自制し、悪行を避ける点において、老人達に似る者達であり、老人達の中で最悪な者達は放蕩<sup>ほうとう</sup>さと無思慮さの点において若者達に似るもの達であるということである。

わたしの兄弟のご老人達、ご老婦達よ。ハディースにもあるように、60、70歳の老いたムスリム達

が、真の主の扉に両手を掲げ祈る時、アッラーの無限の恩寵は、彼らの手を空のまま返すことを<sup>はばか</sup>憚る。

まさしく慈悲はこのようにあなた方に敬意を表している。アッラーの<sup>おんちよう</sup>恩寵のその敬意に対し、あなた方も崇拝行為をなすことにより、敬意を表すべきであろう。







皮膚。それはおよそ1.65平方メートルの表面積をカバーし、全体で約9.5キロの重さがあります。人体において最も大きく、最も重い器官です。しかしその奇跡的な機能は、まだ私達にとっては謎が多いのです。

### 階層構造

人の皮膚は、三つの層から成り立っています。表皮（最も外側の層）、真皮（表皮の下の脈管結合組織）、下皮（皮膚の最も深い部分）であり、これらはとても複雑な代謝を持つものです。皮膚のそれぞれの層には多様な機能があります。私たちが健康を維持するためには、これらの機能がすべて、適切に作用する必要があります。

特に、表皮と真皮にはそれぞれに特有の異なる機能があり、また一部共有する任務をも負っています。これらすべてが人間の生存に不可欠なものなのです。

皮膚の厚みは上まぶたでおよそ1ミリ以下、手のひらや足の裏でおよそ8ミリです。

表皮の範囲内には、異なる作用を及ぼす、4つの異なる細胞があります。私たちの皮膚の外見、きめ細かさ、色、みずみずしさ、全体的な若々しさや健康の具合は、これらの細胞の機能の相互作用によるものなのです。

### いくつもの機能を持つ、一つの器官

大多数の人々が、皮膚が一つの器官であるということを知らない、という事実は、非常に興味深いものです。私たちの皮膚は体を覆うだけでなく、多くの驚くべき機能を果たしているのです。

- ☑ 水分保持を助ける。
- ☑ 体温調節を助ける。
- ☑ 触覚。
- ☑ 有害な最近に対するバリアとなること。
- ☑ 脂肪の保存。
- ☑ ビタミンDの保存。
- ☑ 打撃、衝突に対する保護。
- ☑ 代謝廃棄物の除去を助ける。
- ☑ 環境要因、例えば低温や高温、有害な紫外線などからの保護。



周知のように、皮膚の主要な働きは、人体を有害な環境要因から保護することです。皮膚の基本的な目的が、私たちと外界との間の柔軟な保護膜となることであるのは明白です。微生物や化学物質が体内に入るのを妨げる冗費細胞の層によって、これらは可能となります。

### 定期的な再生

しかし、皮膚細胞が再生されることがなければ、これらの働きは長くは続かないでしょう。驚くべき再生プロセスが、基底層での連続した細胞分裂による交換活動を通して起こっているのです。細胞は外側の方に進んで固くに従い、その柔らかさを失います。それらは順に死滅し、固くなります。死んだ細胞は表皮の表面から常に捨てられています。これらは、より深い層で生まれる新しい細胞と取り替えられているのです。細胞は色々な段階を経て、最終的に固くなり、死滅するか、角質化します。この死んだ細胞の層、もしくは角化細胞は、表皮の最も外側の層を形成します。これらの固く、角質化した細胞は、保護壁の役割をするため、私たちの創造主によって設計されたのです。

そうでなかったとしたら、生きている細胞は、生きた組織を露出から分離するのに必要な保護特性を提供することができません。それによって組織は有害物質から守られるのです。

生きた表皮細胞の死は、とても緻密な過程を経るのです。そして、人体が生き残るために自己犠牲の精神を発揮し、偉大な主からの明白な恵みを示すのです。

### 体温調節

温度調節は、皮膚に与えられた主要な働きの一つと見なされます。私たちは、生涯を通して安定した水分蒸発によって水分を失っています。これは、体液の過剰な損失を防ぐ上で最も重要なことです。血管が広められたり、狭められたりすることによって、さらに多くの汗腺によって、周囲の温度変化に対し、体温調節が行なわれます。皮膚の脂肪細胞は、過度な熱の喪失を防ぐものです。また体が熱せられすぎた時は、皮膚の毛細血管は、温まった血を、冷やされるべく皮膚の表面へ運びます。これらによって私たちは、蒸発を通して体液の損失を防ぐことが皮膚の働きだと見出すことができるのです。

皮膚のもう一つの働きは、脂肪の保存と、ビタミンD（25-ジヒドロキシコレカルシフェロール）の生産です。ビタミンDは食物に存在し、また太陽から紫外線を浴びた後、私たちの体で作られ出されることのできる、脂溶性ビタミンです。太陽の紫外線は皮膚でのビタミンDの合成を刺激し、日光はビタミンDの源となります。皮膚のこの特性は、私たちの骨格の成長に欠かせないものなのです。

### 証人

人の皮膚には、外界からの感覚を受け取るという機能があります。それは周囲の情報を集めるものです。多くの受容体、例えば熱を感じる受容体、冷たさを感じる受容体と上皮内神経終末によって実行されます。皮膚の神経細胞は、外界と体との最初の接触を行いません。誕生の瞬間、新生児の外界との最初の接触は、触覚を通して行なわれます。神経細胞は皮膚への接触、痛み、かゆみ、その他の信号を受け、伝達します。

皮膚は命を持つ被造物と世界との境界線であると同時に、それは命を持つ被造物と、他の命を持つ被造物、そして世界との接点でもあるのです。それは善と悪の接触の場でもあります。

クルアーンは、私たちが最後の審判で問われる時、皮膚もまた証言を行なうと断言しています。

するとかれらは、(自分の)皮膚に向かって言う。「あなたがたは何故わたしたちに背いて、証言をするのですか。」それらは(答えて)「凡てのものに語らせられるようにされたアッラーが、わたしたちに語らせられます。かれは最初にあなたがたを創り、そしてかれの御許に帰らせられます。」と言う。

また、「あなたがたは、自分の耳や目や皮膚が、あなたがたに背くような証言など出来ない(と思ひ)。自分を<sup>かば</sup>庇うこともしなかった。寧ろ<sup>いふ</sup>あなたがたは自分の行っていたことなど、アッラーが沢山知っておられる訳がないと、考えていた。(フッスィラ章第21節・第22節)

蜘蛛章で明示されているとおり、「現世の生活は、遊びや<sup>たむ</sup>戯れに過ぎない。だが来世こそは、**真実の生活**」(蜘蛛章第64節)です。そして人間のあらゆる部分と同様、皮膚もまた、証言を行なうのです。クルアーンの章句は、皮膚が、全ての触覚が記録される、理想的な承認であることを示しているのです、

## 傷と治癒

私たちの皮膚の、もう一つの驚くべき任務は、傷の治癒で示すその役割です。人の皮膚には、自己再生という注目すべき特性があります。これは明らかに、英知による設計を示す者です。皮膚の傷は、底辺の部分、そして端から癒えていきます。最初の段階では、皮膚の基本的な結合組織が、傷ついた部分へと移動していきます。傷の深さによってそれがどのくらいよく回復するかが決まります。再生プロセスはすぐに始まりますが、その引き金となるものが何であるか、私たちはまだ解明できずにいます。傷が癒えると、そのプロセスは急に終了します。この一連のプロセスの最も驚異的な部分が、治癒後の段階にあります。全ての細胞が、その修復作業を行なう時間と場所を完全に認識しているかのようです。まだ誰も、それらがどうして急に活動をやめるのか、どのようにして修復作業を終了させるのか、知ってはいないのです。

## 細菌の遮断

私たちの皮膚はまた、免疫系を組織し、活動させることによっても私たちに貢献しています。一部の特定の細胞は表皮で、もしくは外皮で、最近への免疫反応を調節することで重要な役割を果たしています。

体の免疫系の一端として、バクテリア、ウイルスや他の有機体への体内への侵入を防ぐ最初の防御として、皮膚は莫大な量のTリンパ球、もしくはT細胞を保持しています。これらの防衛兵たちは、バクテリア、細菌、ウイルス、寄生虫、毒素、そして病気を引き起こしうるがん細胞を攻撃し、破壊します。

このように皮膚は、私たちを外部からの攻撃から守り、保護する防御壁なのです。決して、望まれない病原性細菌を通過させたりしないのです。

全能で、永遠であられる創造主は、皮膚という贈り物を私たちに与えてくださいました。主は、無力である人々が何を必要としているかご存知なのです。主は、私たちの細胞、器官、そして代謝の必要性を、明らかにご存知でおられ、だから、人体に最良の構造をデザインされたのです。ちょうど、主に祈る前に、私たちの要求により適したこと、より豊かなものを主が与えられる、ということを私たちが思い起こす必要があるように。率直にいうなら、恵み深き主によるもの、とみなす以外に、皮膚のこれらの奇跡を説明する方法はないように思えるのです。





## 銀河鉄道 999

今回のこの雑誌のテーマは「離婚」と聞きました。ですが、私にはまだ結婚の経験すらありません。自分の両親の結婚も続いています。映画には古今東西、「幸せな結婚」と同じくらい「離婚」を扱ったものがたくさんありますが、今の私にはそれらを見ても、感情と想像にまかせた感想しか出てきません。なので、「離婚」を大分拡大解釈して「別れ」としてお話をしたいと思います。

今回ご紹介したいのは、アニメ『銀河鉄道 999(スリーナイン)』。有名にもほどがある話なので、既にみなさんご覧になっているかもしれません。元々漫画でしたが、テレビアニメ化され、後に劇場版として微妙に違うオリジナルな話で映画になっています。これは、その劇場版のお話。

---

高価な機械の体を手に入れた富裕層が、生身の体のままの貧しい人々を迫害している未来の地球。貧しい少年・星野鉄郎はスラム街で機械の体を無料でくれるというアンドロメダ星に行くことを夢見て暮らしている。鉄郎の母は、鉄郎が幼いころ“機械伯爵”の人間狩りに遭い、殺されてしまっていた。機械の体を手に入れたら、機械伯爵に復讐を果たす。それが鉄郎の生きる目標だった。ある日、鉄郎は、宇宙にひかれたレールを走るアンドロメダ行き超特急列車“銀河鉄道 999”の無期限パスをくれるという美女、メーテルに出会う…。

---

ハテ、何故復讐をするのに自分も機械にならなくてはいけないのか？と、疑問に思った方もいらっしゃるでしょう。私もそうでした。そして、更に色んな「アレ？それさっきと微妙に違う？」という齟齬が出てきます。メーテルも「謎の美女」というだけあって、何がしたいのかサッパリわけがわかりません。

普段はそういう些細なことにかなり厳しい私も、この話は「終わりよければすべてよし！」と言い切ってしまうようになるのが、その終わり方。

---

鉄郎の旅が一段落し、彼は未だ不公平で人間と機械人間の闘いが残る地球へと戻ってきます。999 で旅をし続けること、メーテルと一緒に居続けることも出来ますが、鉄郎は地球で人類のために闘うことを決めたのでした。

「さようならメーテル、さようなら銀河鉄道 999、さようなら少年の日」

鉄郎に見送られ、999 はメーテルをのせて空の彼方へと去っていきます。

---

少年が母の面影を残す女性との旅を経て、子供から大人になったのだ、というまとめがとても浅薄な感じは否めませんし、すべての理屈が松本零士の世界に共通であることも否めません。「だから何」と言いたいのも山々。

ですが、何かとの別れをもって、何かの始まりとする。少年は自分で新たな目標を定め、これから自分の力で歩いていくのだ、という、ものすごい希望を予感させる終わり方で、更にその気分を盛り上げるのが、ゴダイゴの唄う「The Galaxy Express 999」。この曲を映像と共に聴くと、何か明るいことがこの先には待っているのではないか、と思わせられてしまうのです。映像と音楽の好コラボレーションという点でも評価できます。

この最後のシーンだけで「一見の価値あり」、と思うのは私だけではないはずです。

...なんだか今回はゴダイゴの歌のオススメになってしまったような気がしますが、一般的に 3 月は別れの季節で、4 月は出会いの季節。別れの季節という意味だけでなく、元気の出ないとき、何か希望が持てない時など、是非この映画を見てみてはいかがでしょうか。話全体はいかがなものかと思っても、最後には自分にも何か新しいことがあるような、わくわくした気分で鼻歌を歌ってしまうと思います。

「銀河鉄道 999」 1979 年 日本 129 分

監督：りんたろう

原作・構成：松本零士

出演：野沢雅子(鉄郎) / 池田昌子(メーテル) / 肝付兼太(車掌) 他



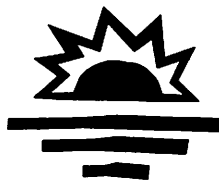


先日、友人宅で夕食をご馳走になりました。食事の後、友人の一人が「クルアーンはこの世界のガイドブックだ」という話をしてくれました。「知らない国に行くときに僕らはガイドブックなどを読んで準備するだろう。あるいは、自分よりもよりその国について詳しい人に聞きに行くかもしれない。快適に安全に旅をしたいからね。そして、あなたの人生にもより良く生きるためのガイドブックが必要になるだろう。クルアーンはこの世界であなたがどう生きたらよいかを見出すためのガイドブックなのさ。」と、こんな話だったので、この言葉は現代社会に生きる多くの日本人にとって、「宗教とは何か」という命題に分かりやすく答えてくれていると思いました。

全ての人は、この世界の中に暮らしています。そして、この世界を形づくっている秩序、法則にしたがって生活をしています。太陽を西から昇らせることは出来ません。人間は酸素を吸って、二酸化炭素を吐き出します。音は音速で進み、光は光速で進み、潮は満ち引きします。空気の抵抗により、羽毛はまっすぐ落下することが出来ません。私たちが学校で勉強した多くの自然科学の法則は、この世界を支配している法則であり、これは神の作り出した秩序の一部を私たち人間が理解したものです。

また、全ての人々は死を迎えるそのときまで自らの運命を知ることはできません。つまり、運命を支配することは出来ないのです。むしろ、その意味で完全に運命に支配されていると言えます。実は、このようなありのままの世界とそれを作り出した神の存在を受け入れることが、私にとってのムスリムとしての出発点だったことを、先の友人の話を聞きながら思い出したのです。

ところで、この世の支配者に自分を投げ出して預けるとは、その支配者が私に望むような生き方をすることです。神が人間に対して語った言葉がクルアーンですから、先ほどの友人の言った「クルアーンがガイドブックである」ということになる訳です。こういうことを書くと、そんなこと当たり前じゃないかといわれるかもしれませんが、宗教についての話題の中では科学と宗教が相反するもの、矛盾するものであるかのような話が出てくるのを見聞きしたことがある方は少なくないと思います。でも科学が研究の対象とするものは他にもない、アッラーの作り出したこの世界であり、それ以外のものではありません。だから、矛盾のしようがないのです。科学が実験や観察から、世界を理解しようとするものであるならば、イスラームは神の言葉から神とこの世界を知ろうとする行為であり、理解しようとする対象は同じものということになりませんか。



我々が地球の継承権を奪われて以来、イスラーム世界はムスリムの脆弱さと敵からの冷酷な攻撃の間で板ばさみとなり、痛ましい窮地に陥っています。不正、不法行為、抑圧といったものは攻撃する者たちの印であるかもしれません。しかしムスリムたちが脆弱であるというのは容認できないことです。神の使徒が「主よ、罪人の恐れ知らずな行為と信者の弱さからお守りください」と仰ったのはおそらくこの事実に言及しておられたのでしょう。

ムスリムの思考と論法が揺らぎ、妨げられ、停滞し腐敗してしまったという事実は、ムスリムたちが道を誤り、クルアーンによって方向付けられ預言者を中心に周回する真っ直ぐな道からそれてしまっていることを意味していました。この崩壊はイスラームの普遍性に影を投げかけ、普遍的であるこの宗教が十分機能する妨げとなってしまったのです。ここ数世紀のムスリムたち、特にムスリムの指導者たちの間で顕著となっているこの慢性的逸脱は、新しい学校を何校か設立したり委員会を設置したり会議を開いたところで打破できるものではありません。

この長年にわたる逸脱—その根源は数世紀前にさかのぼり、現代における科学と技術の誤用がそれを助長しているのですが—を絶つには、我々が我々自身について再発見せねばなりません。我々が誰であるかを見出し、知らなければなりません。そしてイスラーム的な意識、思考様式、論法に再び親しまなければならないのです。そのためには持続的努力、揺るぎない熱意、十分な時間、不断の忍耐、力強い希望、確固たる意志、そして平静さの保持が必要となるのです。しかしながらもし、我々が独自のスタイルを見つけ出すことができないまま過去に陥った穴から抜け出す方法を探し続けるようであれば、自らを裏切ることになるばかりではなく同時代の人々をも失望させることになるのです。

このことを鑑みて、創造や様々な事象をイスラーム的な観点から見ると、そしてすべてをイスラームの論法によって検証するために、我々にはイスラーム的な観念を体得する義務があります。この達成にはまず、人類や人生、宇宙に関する我々の知識が妥当なものでなければなりません。同時にその知識は物事の本質と実態に合致していなければなりません。そしてその起源と目的が同じ軌道を周回していなければなりません。すべての部分が互いに支えあい協働せねばなりません。異なる声部が同じ主旋律を歌うように、一種類のリズムと拍子を用いた作曲のように、連続模様に取り囲まれた中央の刺繍モチーフのように、全体と部分が相関しもしくは相互に接続していなければなりません。どんな事象や物事も、様々な形ではっきりと実質的にその他の物事や周囲と相関しているというように認識され理解されなければなりません。二つ目ですが、宇宙に存在するあらゆるもの、存在、そして事象は世界ほどの意味や内容、英知（英知の連続、体系、そして複合）で満ち溢れているため、数限りない神の業を反映し明示する、あらゆる存在と事象に開かれた一冊の本のように、またまばゆいばかりの深遠な知識にあふれた多面的芸術品のように、



これらすべての物事や事象を理解するためそして些事にとらわれずに細部同士の関連性を理解するためには、道理と思慮分別が適用されなければならないのです。さらには、単一のものや個々の事項の背後に控える総則や普遍的特性に気付いた状態であることによって、細部や個々の項目の最奥部を包含するために総則や普遍的特性に立ち向かっていくときに、我々のなす取り組みや研究そして立証の一部、時代の相違がそれぞれのその他の部分を否定したり、無駄にしたり、矛盾することが起こらないよう保証することになるのです。

これは、特殊化や部門化が無視される必要があるという意味で受け止められるべきではありません。もちろん、我々は一人ひとりがそれぞれの分野に特化し、その職業を極めるべく邁進してその領域で望ましい成果を挙げるべきです。しかしながら、それに携わりながらも、全体としての意味、内容、情勢、そして特に目標や目的が無視されるべきではありません。集団的な意識、知識に裏打ちされたチャネリング、優れた調整、才能、これらどのような方法であれ相応しいやり方で実現されなければならないのです。我々は、一般的、具体的評価に加えて全世界の（普遍的な）、大局的な（包括的な）展望を必要としていることに疑いはありません。

今日我々は何にもまして、以下のような特徴を持つ客観的な知性を大いに必要としています。昨日と今日とをまとめて見ることができること。人類や人生、宇宙をすべて同時に視野に収められること。類似点を指摘できること。存在の原因と理由の種々の次元に対する感受性が強いこと。国家や共同体の興亡や持続をめぐるシナリオを認識していること。社会学と心理学の誤りと欠点、そして利点を判断できること。文明の周期の中で起こる盛衰を察知することができること。目的と手段を識別する技量や健全な良心、そして品性を持ち合わせていること。目的を尊重できること。神の掟に含まれる原則と英知、そして立法者（預言者）の必要性に精通していること。宗教的法令の基礎として容認されている本質的な要素に関する知識があること。神から送られてくる思考や靈感に対して己を開いていること・・・

我々は、邪魔物を除去して閉塞した思考経路を開放し、崇高なものに背をそむけたために停滞してしまった論理的思考のシステムを、クルアーンを中心とする正常な軌道に乗って周回するよう再調整する間も、人類や人生、そして宇宙の秘密を無視してはなりません。宗教が命ずる事柄を絶えず実践し、それらを人生の一部に組み込み長い間途切れることなく続けられる極めて重要な基盤としなければなりません。また同時に、神の預言者が思いやりや優しさ、寛容そして辛抱をもって容易にされたように、我々はその道を滑らかにしなければなりません。預言者は嫌悪感や反感を招くような失望と拒絶の道ではなく、むしろ神の吉報とともに招く励ましの道として示されたのです。

我々は知識や思索の力をイスラームとイスラーム的解釈のために役立てなくてはなりません。そして過去数世紀の不毛さと非生産性に終止符を打つべきです。家庭でも街角でも、学校でも崇拜の場所でも、あらゆる場所に、人類や人生そして宇宙の背後に隠された真実が目撃できるような展望台を設置しなければならないのです。

何世紀かにわたって封鎖されてきた、永遠への道を再び開かなくてはなりません。イスラームを、人生

のあらゆる要素において重点を置かれるような最重要課題に据えなければなりません。

我々は原因と結果という問題を敏感に扱わなければなりません。そして原因の関連性や割合といった本質ののっつて理性的かつ計算的に行動しなければなりません。認知、理解、成熟といった理解の特質によって我々の再生や刷新が促され、永遠の生への土台がもたらされることでしょう。

原因にそれほどの重きを置くのは不適切だと思う人もいるかもしれません。私もある意味では同意します。しかしながら人類は義務付けられたことをせねばならず、神の力が必要とされることに干渉してはならないのです。与えられた任務が我々の責任であって、その任務を果たすために原因に頼ることは、ちょうど望ましい結果を得るためになされる祈りと同じように、神の慈悲という扉の前でなされる嘆願なり請願書であるわけです。これに納得するのは、我々は被造物で神が創造者であるという事実を受け入れることの前提であり、神の属性を認識することの前提であるのです。

しかしながら別の見方もあります。神は我々に自由意志（その存在はわずかだと考えられています）をお与えになっています。そして神のご意志そして意志力への招待として容認してくださいませ。そして最も重要なプロジェクト、すなわち神がこれまで実施なさりこれからもし続ける計画、をこの意志の上に築くことを約束されます。神は我々の意志を功德もしくは罪を選び取る原因として、また報酬や懲罰の根拠として創造され、善と悪を抱く作用物として受け入れられます。

このことに帰される結果として、神は、それ自体は価値のない我々の意志に他の何ものにも勝る価値を受けるといふ恩恵を施してくださったのです。もし神がそうしたださらなかつたら、人生は終焉を告げ、人間は無生物に成り下がり、神のしもべに義務を与えることは無意味となり、すべては無益、無用、不条理と化してしまっていたでしょう。だからこそ、神は我々の意志、人類の希望や願望に重要性を付与したのです。現世と来世両方の建設、その成功の条件として受け入れてくださり、あたかも世界中を照射できる強力な電気装置の電源を入れる魔法のスイッチのように、非常に重要な要因にくださったのです。同様に神は一滴の水から大洋を、原子から太陽を創造し、無からすべての世界を存在させ、その力の神秘的側面の一片を顕在化されているのです。

原因も、その他の何ものも、全能の創造者であられる神に支配や影響を及ぼすことなどできません。神意と神通力を束縛できるものなど何もないのです。すべては命令を受けているもので、神だけが唯一絶対的な支配者なのです。それでもなお、原因を観察して結果をそれに帰し、結果がもたらされた理由を媒体のごく一部分として評価することは神からの命令でもあります。ゆえに、「スンナトゥッラー（神の慣行）」と呼ばれている神が創造した自然の法則の原理を守らない人々を見ると、彼らはこの世で大打撃を受け、おそらく来世でもある程度そうなるのではないかと考えられるのです。

第二代カリフのウマル様が、疫病の流行っている地域を避けたという故事はなんと有意義なやり方でしょう。運命を甘受し運命に服従するという考えのもとに行った逃避に同調できなかった人々に対し、彼は「私は神の意志を逃れ、神の意志に戻っていく」と言ったそうです。

物事への取り組みや、行動、活動、努力をする際、よく考えもせずに結果志向となり、もたらされる結果だけが人の望みの唯一の目的となってしまう、不必要に過度の負担を背負い込んでしまうことは、あたかも、神と駆け引きしているかのような（神がそれを禁じたもうことを祈りますが）苦しみであり見当違いであります。その一方で、人が選択する権利やその意志を軽視して、まさに奇跡的な驚くべき方法で神から直接素晴らしい結果がもたらされることを期待するのは、おかしな幻想であり、思い違いであり、浅ましい話といえるでしょう。聖クルアーンの中でも、多くの章で「かれらの行に対する報奨として」、「稼ぎに応じた報奨として」、「かれらの行いに対する償いとして」と何度も言及されています。

クルアーンは人々に、今までに経験したものやこれから享受もしくは被る善や悪は、己のとった行動や振る舞い、行為の結果であると警告しています。心と知性、良心のバランスがとれた完璧な見本であられる神の預言者は、「人は審判の日、一步も動くこともできないまま、人生をどのように過ごしたか、また知識をどのように用いたか、また財産についてそれをどのように入手してどのように費やしたか、また体をどのように使ったかを問われます」とおっしゃっています。預言者は原因と結果、そして結果と得るものの強く神秘的な関係について指摘しておられるのです。

イスラームはクルアーンとスンナを通じて信者の信仰と行動、祈りと道徳心、そして現世と来世での生活について規定していますが、同時に我々の知性や心、魂、感情、良心、そして意識といった世界の中に、異なる次元の領域すなわち超越した世界から、言外に様々なものを囁きかけてくれるのです。そのため我々の人格の奥深くでは天国のそよ風が吹き、神聖な素晴らしい感情が沸き起こるのです。このようにイスラームは一瞬一瞬、人間性を今一度、異なる次元でよみがえらせてくれているのです。

このようにして我々は、我々自身が神の代理人の地位にあること、自然現象に介入する地位にあること、そして自然法則の不思議を理解し考察する地位にあることを見出します。そして我々は、神の意志と力からもたらされ、啓示を通じて神の属性「カラム（言葉）」から流れ出る宣言でもある宇宙という本を、一つの個体の表裏として読み取ることができるようになります。そして我々は地上と天国のバランスに照らして、自らの思考と認識、行動と態度、現世と来世に関する考察を規定することができるのです。

イスラームは知性、体、魂、そして人類の良心を通じてその縦糸と横糸を織り成しています。そしてこの世とあの世の異なる次元を絡み合わせ、色とりどりの豊かなレース細工に仕上げています。方向を変更するごとに、知性と、体と、魂と良心のより糸は互いに上になり下になり重なり合うのですが、そのどれもが単一ではイスラームを反映し象徴することはできず、またイスラームの真の意味と完全性を表現することはできないのです。

全能の創造主からすべての存在にもたらされた普遍的かつ最も素晴らしい贈り物であるイスラームは、何よりも神の恩恵のおかげで、そして知性や良心、魂、体、そして魂の内にある優れた特質から作り出されるものを通じて、あらゆる創造の中で精神的な印である人類によって実生活にもたらされるものです。このことについては後に続く項目の中でさらに詳しく述べていきます。



江住 よしえ

日本では熟年離婚が大きく取り上げられるようになりました。法律が改正されるとさらに離婚率が高くなると推測されています。

社会の一番小さい単位は、夫婦である男女です。その男女間の小さな社会が崩れることが離婚という結果だと思います。夫婦間がうまくいかないともちろん家族もごちなくなります。夫婦間の崩壊が社会の崩壊につながるという話を聞いたことがあります。社会の一番小さな単位が夫婦と考えると納得のいく話です。

私は時々こう考えています。私達の前にも私達の後にもたくさんの人間がいます。そして世界にはとてもたくさんの人がいます。その人間の数を想像すると、自分が一生のうちで関わる人間はほんのわずかです。家族や親戚など自分が生まれた時から関わる人間もいれば、長年の友達や伴侶もいます。「一期一会」という言葉があるようにたった一度の出会いである場合もあります。そんな風に考えると、自分と関わりがある人、今日自分とすれちがった人でさえ貴重に思えます。初めて会った人でさえ貴重な出会いであるようにも思えることがあります。

私達は人生という小さい規模で物事を考えがちですが、実は自分の人生の前にも膨大な時間が流れていて、自分の人生の後にも膨大な時間は流れています。その膨大な時間を考えると自分の人生はほんの小さな小さなものであることにすぐに気づきます。なんて貴重な時間でしょう。その貴重な時間を他の人とのいざこざには費やしたくはありません。貴重な人生で貴重な人達と。限られた時間を限られた人達とあたたかく過ごしたいものです。

話がそれてしまいましたが、夫婦という男女関係においても自分と関わる人達においてもそうですが、とにかく私は出会う人はみな貴重であると考えなのです。とくに人生を共にしようと思った相手はなおさら貴重な存在に思えます。膨大な時間の中の、自分の人生でたった一人の伴侶を見つけたのですからその存在を手放すのはとても残念なことです。

私が考えているように大きな規模で物事を考えると、自分に関わる人が貴重に思えると思います。こう考えるのは私一人だけではないと思います。

購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

（2004年、2005年、2006年のやすらぎカバー付き製本：郵送料込み 2500円）

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号: 630 (春日部) 口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> [info@yasuragiweb.com](mailto:info@yasuragiweb.com) [yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404 「やすらぎ」編集部